

村野次郎創刊

香蘭



2025年(令和7年)2月号

第102卷

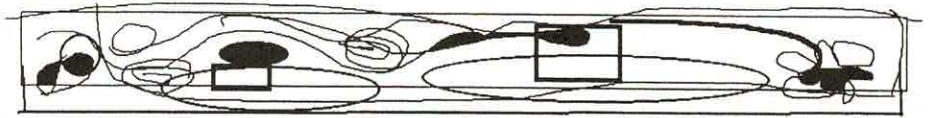
第2号

通卷1130号

二〇二五年(令和七年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二卷第二号



香 蘭

2025年(令和7年)2月号
第102巻 第2号 通巻1130号

目 次

村野次郎作品	私の愛誦歌(114)	田中あさひ	表二
近詠十五首	カスターマーサービス	伊藤康子	2
作品	一		4
	二		21
	三		29
	推薦香蘭集		35
	香蘭集		36
作品一	十首選(十二月号)	高島憲子選	14
作品二・三	十首選(十二月号)	丸山三枝子選	16
村野次郎への旅(178)	昭和期の「香蘭」(十三)	千々和久幸	18
一頁公論(45)	尾上柴舟の歌	澤田久美子	20
続・酔風船(14)	偽りの死	千々和久幸	28
白井絹子「四季折々に」評(十二月号近詠十五首)		朝香ふさ枝	40
七首抄(十二月号)		丸山・小野・柏原(真)・市川	41
焦点(十二月号)	色彩の入る歌	江口絹代	42
作品評(十二月号)	作品一	青山侑市	44
	作品二	村上美智代	46
	作品三	竹本幸子	48
	香蘭集	中島由美子	50
緑地帯		能城春美・石川詔子	52
明宝研究会 第一五八回	白秋を学ぶ	初期の短歌と詩	56
他誌拝見 137		小笹岐美子	66
歌会及び会合・会員消息・他		満木好美	69
令和7年 香蘭短歌会 全国大会 参加申込書、ご案内等			75
編集後記・新宿日記			80
表紙絵……山口蓬春「桔梗」			表三
	目次・緑地帯カット		和田和雄

あたたかく掌の上に生みたての

白き卵をいただきにけり

『夕あかり』

この一首は、昭和十四年に母堂が没した際の
一連十一首中に置かれている。前年には国家総
動員法が公布されていた。

よって、前後の作品も併せて読むと、貴重品
となっていたであろう「卵」をモチーフとして、
生みたての温かい「卵」が「死」に對置する
「生」であることを掌上に感受していると、続く
「いただきにけり」は敷衍して言えば、このとき
四十五歳の作者の、「卵」という小さいながらも
初源的なものを介しての、この世の総ての「生」
に對する敬意と受け取った。

『村野次郎全歌集』の「解説」(千々和久幸)
には「その師白秋は歌を人生にし、次郎は人生
を歌にした。」とある。

そこで、先の一首に白秋の「卵」作品(大
なる手があらはれて昼深し上から卵をつかみけ
るかも)(大正四年『雲母集』)を並べてみると、
右の評言がストーンと胸に落ちる。

カスタマーサービス

伊藤 康子

大安の晴れの日待ちで新しきパンプス下ろす通勤用だが

朝早く着いたら隣のコンビニでおやつのチョコを選んで出社す

賃上げはほんとにうれしい知らせだが天引きも増え手取り変わらず

夕日受け第三豆丸帰り来るうつむき加減の釣り人乗せて

したこともしなかったことも決めてきた今夜は激辛麻婆丼だ

申し訳ありませんのみで十五分要件だけなら二分で終了

生産性低い我らのカスタマーサービス業務はAIになる

罵声慣れしてきた耳にまつすぐな「ありがとう」来て調子が狂う

やめるのはやっぱりやめると若き友グータッチして業務に戻る

やめたならどこへ旅行に行きますか社員の推しは宇奈月温泉

給茶器の浄水頼みに飲んでいるケロリンはやく効きますように

ひと言随想
時が近づく

古い母は気がかりになると指折りぬ地震強盗火事康子とか

残業で遅いと連絡してるのに母は戸口に立ちて待ちおり

ブヒブヒと亥年おやこ母娘で隣り合い暮らし始める時が近づく

ミツマタの花は冬日の温もりを幾重もまとい黄の濃くなりぬ

コールセンターでパートを始めて二十余年。
「何で電話がつかないんだ。いつまで待たせるんだ。」の怒声で通話が始まる。たまに「つながってよかった。」の安堵の声もある。コロナ禍の中、クラスター発生を恐れつつ出勤していた頃に比べれば、アクリルプレートも外され、随分楽な気分で働いている。気付くと会社にいるって感じがすると眩くと、よく分かるけどかなり毒されてるねと若

い同僚に笑われた。生々しい言葉が常に飛び交う毒された暮らしの中に香蘭誌が届く。別世界の息づかい、言葉、手ざわり、場面を味わえるのが何より有り難い。家と職場の往復のみで、月始めには翌月のシフトを出しながら年月を切り売りしてゆく。今は、辞めると言われるまで働かせてもらえただけで十分だ。いずれ終点が来る。そしてその時が近づいて来ているのを感じる。

四選者の作品

落葉と酔漢

平塚 千々和 久 幸

愉しくはあらぬ酒ゆえ飲み過ぎて木枯らしの街に吐き出されたり
月のなき夜の公園を酔漢が散りくる落葉に巻かれて過る
公園の街灯ぼんやり点れども酔漢の表情までは見えざる
ご機嫌な酒かそれとも自棄酒かひどく酔いたる男がひとり
この男にも得意な日々があつたのだ風に追われるように消えしが
行き惑う落葉かそかな音を立て男の後ろを吹かれて行けり
夜の底に消えて行きたる酔漢を昨夜のわれと思ひていたる
ひさびさの夢に出て来し妻なるがもの言わぬ間にいずこかに消ゆ
ブルー・ライト・ヨコハマ 鎌倉 高 晶 憲 子
歌手の名は知らざる若き介護士が上手に歌ふ（ブルー・ライト・ヨコハマ）
いしだあゆみ身も顔もいたく細かりき駅前スーパーに一度会ひたり
逆光に顔見えざりしいしだあゆみの若き立ち姿 蠟燭のごとし
はす向かひの獣医の自慢のひとつなりいしだあゆみの飼ひ犬診しは
藍染めの着物に髪を引つ詰めしいしだあゆみ若し寅さん映画に
香蘭のむかしの記念写真にはいしだあゆみに似た人が居た

横浜から転入の子が歌つたなあ自己紹介に（ブルー・ライト・ヨコハマ）
鎌倉の海辺を犬と散歩せし季節ありしいしだあゆみに

夢ばかり

我孫子 丸 山 三枝子

果たさざるままの約束あるならん何処までも清む空の明るさ
ふりむけばそこに答えのある筈もなく泡立草が揺れいる
迫真の歌評飛び交うなかにて眼鏡の行方思うつかの間
余命宣告受けたる友が淡々と歌評をなしてドアに消えたり
ちかごろは夢で良かったと思う夢ばかり見ている夢は夢なり
犬の安否を気遣いくるメールあり（コムは天国に行きました）
おはようと写真の犬に声を掛けおやすみと言ひ灯りを落とす
（人はひとりで死ぬ）と谷川俊太郎言えりひとりで星となりたり
女友だち 東 京 桜 井 京 子
花梨の実ひろつてみたが持て余し置いてゆきしかベンチの花梨
「店じまひ」予告しながら二丁目いつまでもやめぬブティックがある
おいしいと言ふほどでなし通販の俵万智さんのうすやきイワシ
雨のよる会合ありて盛りあがり彼奴が好いと言ふ女友だち
悪人のほとんどぬない物語本屋大賞とぞ読み終はりたり
診察券かざして会計すませたり便利でつまらぬ世界になつた
性格が悪いと言はれ悩むのはもうやめにせむ熟れた栝榴よ
正直はいいことなれど私とは違ふと言へり石路の花

作品一 十首選



(十二月号作品から)

高 島 憲 子 選

・「いざ生きめやも」かあ 生きたとて死んだとて何が変わろう風よ 千々和久幸

初句から、ポール・ヴァレリーのよく知られた詩句をぶつけてくる。「風立ちぬ」の中で堀辰雄が美しい文語で訳し、現代でも魅力あるフレーズ。小説のテーマと相まって「風が立った、さあ、生きよう」と読まれてきた。ところが「反語があるから意味が逆。堀の訳は誤まり」という説もある。作者はそこを捉え、生きたとて死んだとて何が変わろう、と軽妙に切り返す。ここにも反語があり、何も変わらないんだよ、と風に向かって嘯く。かっこよすぎではないか。死んだふり、生きているふりも自在、本心は明かさない。しかし、いざ生さん、の熱量を秘めた作者である。そのまわりに吹く風はいつも飄々と軽やかだ。

・ただひとつ心残り猫は猫のこと猫より先に死んではならぬ

伊藤美恵子

香蘭きつての愛猫家の一首。前の歌が、生きても死んでも何も変わらないと詠んだのとは対照的。この猫を置いては死ねない作者。猫は、実在の飼ひ猫であろうが、飛躍して様ざまに置き換えて読みたくなる。たとえば、老いた親や、伴侶、障害を持った身内や子ど

もだったり、これを置いては死ねない、は誰にもあるのではないだろうか。寿命比べにもなってくる。この作者、その対象が愛する猫である、というところ、人柄がにじむ。大切な者を看取るべく、どうぞ、長生きしていただきたい。

・非常時の備蓄品目メモすれば備えた気になるようになる

伊藤 康子

一読、わがことかと、びつくりした。これは日常、よくあるなあ」と読者の共感を得るだろう。この作者は、何気ないところから歌の種を拾う達人。結句だけ気になった。四句までで、十分、一首として成り立つ歌、と思うので、最後に念を押されたような感じを受けた。(なるようになる)は、筆者もとても好きな言葉。胸中に秘め、言わない詠み方もあろう。

・会いたいと返信くれしが今もまだ何時会おうとは決まらぬままに

川原 優子

メールかライン、あるいは、便りの返信か。しばらく会わないでいる旧知の人とのやり取りであろう。とりあえず、会いたい、と返したり、返されたりするものの、では、いつ、どこで、という具体的に発展しないことはよくある。お互いに諸事情を抱え、昔ほど気楽に動くこともままならない。人情の機微を詠み、心惹かれた。

・猫のため冷房いれて来ましたと友は現る汗をふきつつ

斎藤 俊子

二首目の伊藤作品の続き話のような歌。この夏の酷暑の日々の一場面を想像。クーラーの未使用で高齢者が亡くなった事例が相次いだ。室内に飼う犬猫、小動物も同様で、死活問題である。高齢猫、傷病猫、諸事情あったことだろう。この作者の友である飼ひ主も、

飼ひ猫の命を守るケアを十分にしてお出ししてきた。たかがペットだが、アニマルセラピーという言葉通り、今やペットの果たす役割が重視されている。そのケアを怠らない友なのだ。それを労わる気持が、結句の描写にうかがえる。

・A-Iは苦もなく短歌を作るとふ われ泣きぬれて蟹とたはむる

城 富貴美

まず、現代の事象を述べ、受ける下句におなじみの啄木歌をもつてきてハツとさせる。機知と発想の豊かさがある。関西在住の作者ならではのパロディ。笑いの要素も入っている。苦もなく短歌を作るA-Iに対し、生身の人間である我は、今日も泣きぬれて(苦しんで)啄木ではないが蟹とたわむれている、と自虐も入れて読者の微笑笑と共感を誘う。A-Iなんかにやすやすと歌を作られてたまるか、という反骨も入るベテランの一首。

・台風で防災訓練中止とぞこの日のための訓練なのに

土井紘二郎

身边で実際にあった出来事だろう。ストレートな物言いでもまさにその通りである。だが案外、言われて気づくことかもしれない。作者の胸中そのものが自然に歌になっている。日頃、短歌作りのアンテナを磨いている作者。このように、些事がすつと一首になる。

・洗い残し拭き残しある夫の家事やり直しするが妻の家事にて

長野 道子

思わず、お疲れ様です、と相槌を打った。(歌はモノローグではなくダイアログ)は千々和代表の言葉。この一首も読者に語りかけてくる。夫の家事は有難いけれど、その後の様ざまなフォローがたいへん。やらないで、とも言えず。お礼を言い言い立てながら、で

あろう。身につまされる歌。対話のように返事を書いている。

・ミッシェンはとつと片して旅立つのポルタ・ロツサで指輪を買う
うの
中村 美幸

ミッシェン、とつと、ポルタ・ロツサ、声に出して何回も読むと実に楽しく、弾むようなリズムをもった軽快な一首。作者は以前歌集『短歌放埒』を出版した実力者。しばらく諸事情で、休詠されていたが、嬉しい事に今回より復活。このポルタ・ロツサ、とは実際にフィレンツェにある通りの名。ここで指輪を買う、という歌詞がオペラの一節にある。そのような知識を持たずとも、どこか外国の洒落た場所や店が、イメージとして見えてくる。とつととミッシェンを片して、旅に出たくなってくる。筆者の当面のミッシェンはこの原稿の仕上げであるが。

・六月ぶり歌会に出んと船堀へ 二百五十回の記念日なれば

西野美智代

事実をそのまま詠んでいるが、この二百五十という数字、作者が立ち上げ、育ててきた船堀支部の歴史を雄弁に語る。香蘭の読者は、この支部が平成十五年にスタートしたことを知っている。その一回一回を大切にカウントしてきたことがしのばれる。その地道な積み重ねの上の今日。赤ん坊であれば、とうに成人の年月。作者の胸中はいかばかりかと思いを馳せる。六月(むつき)ぶりとあれば、事情あつてのお休みであるうが、記念日の今日は、と出席されたことがうかがえる。歌作りも仲間との交流も、細い糸でつながりながら継続している自分の身をも改めて省みた。香蘭の血管のような支部である。大切に守っていこうとする作者の気持を尊く思った。

作品二、三 十首選



(十二月号作品から)

丸山 三枝子 選

・セクハラもパワハラも蹴っ飛ばしなやかにしたたかに行け女性たちよ
小笹岐美子

一連六首のタイトルは、NHKの朝ドラの「虎に翼」。このドラマに描かれた女性らの社会進出に共感した作者の女性への応援歌と読んだ。連日のように、セクハラやパワハラ被害が取り沙汰されている現実を憂い嘆いている作者。二句は必要不可欠の十首の字余りと読んだ。「蹴っ飛ばしたたかにしなやかに」の畳みかけは意識されたものである。四句の命令型に続く結句の呼びかけからは、被害者の女性たちへの励ましを窺える。

・珍しくテレビで野球を見てる夫大谷翔平良いところで打つ

小林ますみ

世界の大谷翔平選手を詠む歌は随所で絶えないが、ここでの主人公は「夫」である。いかにも家族思いの作者らしい歌で立ち止まった。農作業で日々忙しい夫が珍しくテレビを見ていたその時に、応援している大谷が打った。ホームランだったかも知れない。試合運びでの「良いところ」ならぬ、夫にとつての「良いところ」なのが良かったなあ、と微笑ましく立ち止まった歌である。

・大都会トーキョーの夜を見下ろして童話のごとく満月のあり

田村 久美

ここでは、「童話のごとく」の比喩が一首のキーワードであろう。三日月や半月ではない「満月」にも意味がありそう。月と童話で先ず思い出したのは「竹取物語」のかぐや姫だ。物語の中で翁は（月の顔を見るは忌むこと）と、月の光を見ることを制したが、わたしたちは夜になれば自ずと空を仰ぎ、晴れた夜は月を探している。平安時代前期に書かれた「竹取物語」は童話とは異質で、とてもシビアな物語なのだが一読、この下句のフレーズから、かぐや姫が浮かび、心惹かれた。

・人生の終点近きこの道を道草しつつゆっくりゆかん

藤本佐知子

「人生の終点」にあるのは「死」に他ならない。代表の第四歌集『人間ラララ』に、〈この国の明日を問われてそこにいる人たちはみんな死にます〉のアイロニカルな作品がある。ここでも傘寿を過ぎた作者の達観が匂ってくる。下句のフレーズのゆったりとした人生観に、読者はホッと心弛む思いがする。人生は一本道ではない。「道草しつつ」の含蓄のある措辞に魅せられた。

・さわやかにビール飲みいるコマーシャル十二単の姫なりし人

三澤 幸子

NHKの大河ドラマの「光る君へ」は欠かさず見ているが、主人公は藤原道長と紫式部。『紫式部日記』を読むと、ドラマでは脚本家の創作がいくつかある。ネット情報によると、これはビールのコマーシャルで、そのビールを飲んでいる女優は「光る君へ」の登場人物の一人らしい。余談だが、十二単は、単ひとへの上に十二枚の袷あはせを重ねた

襲の装束のことだが、千年前の小説の衣装を整えるのは大変だと思
う。作者は主人公より、コマーシャルの俳優に拘っているようで、
愉快に思った。

・夢のつづき見せるがごとく昼顔の二輪ほのかに荒草の中

安田 恵子

「昼顔」は道端や野原に自生している一重の淡紅色の寂しげな花。
昼に開いて夕刻にはしぼむ。咲いている間も、なるほど夢を見てい
るように儂げな風情だ。想像力ゆたかな上二句の比喩に得心が行く。
亡き西澤みつぎ選者の『うつろふ』の作品（昼顔はぐれてもぐれて
も美しき少女のごとくあら草のなか）が蘇る。この歌の前に置かれ
た歌は、〈夕暮はみな淋しくて蓮池の蓮の花托はどれも下むく〉で、
この歌も捨て難い。昼顔も連も一日花である。

・前をゆく夫の肩先のルリアゲハ改札口でついと飛びたり

脇谷 房子

「ルリアゲハ」は、羽が紺色に近い青の美しいアゲハ蝶である。何
処かで「夫」の肩先に止まった「ルリアゲハ」が、電車の改札口ま
で、そのまま止まっていた、眠っていたのかも知れない。一列に入
る改札口にきて始めて気づいた作者なのだろう。一寸うれしい驚き
の一瞬が見えてくるようだ。ルリアゲハは、（では、この辺でさよう
なら）などと言って飛び去ったかも知れない。

作品三

・北口の老舗書店の窓際でハヤシライスを食べてるわたし

川久保百子

一読、報告歌のように面白い味わいだ。北口でも西口でもいい

ようなものだが、何か意味あり気に立ち寄るのは「老舗書店」だと
言う。それなのに書物のことには触れず、（窓際でハヤシライスを食
べてるわたし）だと言う。このとぼけた風情の、大らかな物言いが
何故か面白い。こう言われると「北口の老舗書店の窓際」でないとい
けないし、食べているのは「ハヤシライス」しかあり得ないよう
に思えてくるから不思議だ。読者を立ち止まらせるとほけぶりど
も言おうか。

・にはたづみ消えて残れる病葉に烏揚羽が翅をふるはす

澤田久美子

「にはたづみ」は、雨が降って地上にたまる水のことだが、ここで
はその「にはたづみ」に浮かんでいた「病葉」が乾いてそのまま残っ
ていたのだろう。その病葉に今、「烏揚羽」蝶が来て翅をふるわせて
いる、と言う。見逃しがちな、小さな動きが掬われている。「病葉」
と、小さな命の対比がとても繊細な視線で捉えられており、スケッ
チというか、素描画を思わせる。

・平成と令和も六年生きのびて良きことはみな昭和にありぬ

中野美代子

昭和時代は六十三年、平成時代は三十一年、この令和は七年目に
入った。作者は、昭和が一番良かったと回想する。

昭和にはあの激動の太平洋戦争があり忘れられないが、それは七
十九年という歳月が風化してくれただろう。作者にとつての人生の
良き思い出は、どれもみな昭和の時代にあった。人は誰も年齢を重
ねるにつれ、自らの人生を振り返り、良き思い出を大切に、或いは
それを支えに生きていく。

村野次郎への旅 (178)

昭和期の「香蘭」(十三)

千々和久幸

前号では前號歌壇合評の中途で紙幅が尽きたので、その後を書き継ごう。「香蘭」は第五卷第七號(昭和二年11927)七月号にさしかかったところである。

松村英一作品の評者筏井嘉一の発言の後半から書き継ぐ。該当作品を再録しておく。

國民文學

松村 英一

ひろ桶よこたへられし鯉の眼のすゞしき
かなや光うるほふ

眞鯉はも何におどろく尾をはねてつめたき
水をはじき飛ばせり

(嘉一)……その癖、作品に、しつくり親しんでゆけない氣するのは、(すずしきかなや光うるほふ)とか(眞鯉はも何におどろく)とか(つめたき水を)とかいふ發想法に、物象に對する態度の上で、何かしら、へだたりがあるのでないかと思はれるのであります。そこに、自分で、はつきり説明できない、あるもどか

しさを感じます。こんなことを言ふてゐては批評にも何にもなりません。おゆるしを願ひます。

日光

川田 順

下つ瀬に築の堰見ゆかへりには寄らむと思
へその築の小屋に

この町の目ぬきのとほりはや過ぎてむしろ
の藪に日の照るところ

(翠子)これは二首とも紀行歌でせう。紀行歌といふものは、反つて主観がない方に私は賛成します。(一)のお歌の「かへりには」など々と云はれても、私には一向興味が起こらない。

(二)のお歌の「目ぬきのとほり」の口語に近い言葉がこの歌を一層安價にさせてゐます。「むしろの藪に日の照るところ」も随分、大ざっぱの寫生で片づけました。

紀行家としても勝れてゐる「たまくしげ箱根の山を越えくれば」の歌にしても自分の心持をあらはに云はずに、山上風景の展開のみ訴へてゐる。そこに反つて自己の存在と自己の意識が織り込まれてゐる。紀行歌に自己説明は殊に邪魔をすると思ひます。

(次郎)氏の歌は一本調子であり、棍棒で物を叩きつける様な直接行動的などが基調をなしてゐる。然し其一面に案外デリケートなしほらしさを持つてゐる。私はこの事を甚だおもしろく感じてゐる。「この池に睡蓮咲けりまはり道の少しのことを人は來ぬかも」と云つた手である。この(一)の歌矢張り同じ行方であるが前歌の澄んでゐるのに對してこれは少し雑音が交つてはゐまいか。

(二)聊か尻切蜻蛉である。そんな事に拘泥しない所に氏の一面が見えるのであるが私にはまだたんのう、出来ないのである。

創作

大悟法利雄

立ち出で、門べに仰ぐ今朝の空光ははやも
夏ならんとす
かそかなる風を感じて青草の野蒜の花のゆ
れあへるかも

(翠子)何といふ月並の歌でせう。二首ともい

かに幼稚と陳腐でありませう。内容も月並だし、その表現法がこれまた短歌として一番やさしくまとめられる常套的句法で、こんな歌なら恐らく女學校の生徒にも出来るでせう。もうすこし男を見せて下さい。

(次郎) 前評者の言はれる程三文の價値もない譯でもあるまいが、まだ迫つて来る力が缺けてゐるやうである。二首共下句が出来上がつて上句がまだ熟してゐない。(一) 上句は力足らざるの感があり(二) 上句は下句の補助的説明句を出てゐない。凡そ狙は定まりたれど未だ力及ばざるの感か。

今月は余白に北原白秋の短歌「鴨」七首が載つてゐる。理由も出所も説明はないが、左に抜いておく。

鴨

北原 白秋

沖つ鳥鴨のかしらのまさをくてつらつらかなし
泛きにけるかも
もこもこまだ盛りあがるたづきなき波の胸
腹に鴨は居るなり
まなかひにおほにそびやく蒼の波かなたなぞ
へに鴨は居らしも
つれづれと鴨のすべるぞおもしろきこなたな

ぞへになり来る波を

夕風に海波のあひさにゐる鴨のかなしき聲は
空にとほれり

ここ過ぎて草は空より新なり汐首岬といふが
かなしき

正眼にも夏は光りてとどろきぬ汐首岬の雑草
のいろ

(原文のまま)

村野次郎の編輯後記から抜き書きする。

○香蘭の歌調が一つの或色彩を持つて來たと
言はれることがある。香蘭は鑄型主義や歌壇

の城壁を必ずしも喜ばない、もつと個性の自由な發達を希望してゐる。そして今は一つの

力とさへなつてゐる。自然このことが歌壇の新しいに資する事は大いなる結果となるであらう。

作つた力より生れた力でなくてはならない。自然に根を張つた若木でなくてはならない。

○香蘭は相互に信じあつた集りであるべきである。個性を尊重するとは云へ心定まらず諸

所歌壇を流浪する者は私達の友ではない。雑念のみに捉はれず本道を忘る者は自然遠慮されて然るべきであらう。

○六月中央公論所載の北原先生の小説「秋山小助」は近來興味深く讀んだものの一つである。如何なる方面にも先生らしき光と香氣が見えて誠に喜ばしさを禁じない譯である。

○酒井君は目下旭川に帰つてゐる。九月頃は東京に定住出来るであらう。篠井君の原稿は來月分のもので豊富に出来てゐる。君の新作は大いに期待し得ると思ふ。杉浦女史は更に短編に筆を染めた益々女史の面目を窺ふことが出来る様である。川村君の病氣は一進一退であるが漸次快くなるであらう。元氣だけは大了たものである。眞島君今月は力作を寄せた、本格に近い。

○穂積、池上、深野、清原、島田、荒木、橋本、横山等の諸君の近來の沈黙は寂しい。一月に一首や二首位出来さうなものだ。何とかして勢のよい所を見せて欲しい。

○此度から發行部數を大分増加した。今まで寄贈を受けた諸雜誌社に送附することが出来ず失禮したが今月から何處へも落ちなく送れるであらう。(原文のまま)

編輯兼發行人としての村野先生の八方への目配りが感じられる。

一頁公論

(45)

尾上柴舟の歌

澤田久美子

尾上柴舟といえは、平安朝草仮名の名手として思い浮かべる人が多いだろう。柴舟は、歌人、詩人、国文学者、書家として多方面にわたり活躍した人である。

柴舟は明治九年、岡山県津山に生まれた。明治二十三年に上京、大口鯛二の門に入る。のち、第一高等学校在学中に落合直文の浅香社に入門。この頃から雅号「柴舟」を用いるようになった。

・さしわたる葉越しの夕日ちからなし枇杷の花ちるやぶかげの道
・むらがりてさわたる小鳥かげ絶えぬ裏のくさやまた、秋のかぜ

一首目は故郷・津山の風景であろう。「ふるさとの道」ではなく、「やぶかげの道」と詠まれているところが当時としては新しい。二首目、故郷の空間の広さ、自然の静寂が詠まれ、

のちの瞑想的、内省的な作風をうかがわせる。いずれも金子薫園との共編による『叙景詩』(明治三十五年刊)より。

明治四十年に第二歌集『静夜』を、同四十二年に第三歌集『永日』を出版した柴舟は、明治四十四年、小石川原町に転居する。そして大正二年、第四歌集『日記の端より』が上梓された。

・つけ捨てし野火の烟のあか／＼と見えゆく
　　頃ぞ山は悲しき
・外套に草の実すこしつけながら冬なる家に
　　野より帰りぬ

・これもまた冬のとははれ戸の外にわが外套
　　のおもたきを着る
一首目、広く愛誦されている作品。柴舟の代表歌といわれる。

二首目、初冬の頃か。実をつけたまま立ち枯れた草が風に吹かれていると、ことさらに冬の初めの趣である。仕事か散策の帰りに、道端に立ち枯れている草に目を留めたかどうか。

つづく外套の歌。「外套」は防寒などのため洋服の上に着る衣類。当時は厚い毛織の生地、入念に仕立てられたと思われる。寒さを

嫌っていたという柴舟は、後年、奥様と共に風をひき、休んだこともあったらしい。

「外套」が出たから、というのではないが当時の服装に少し触れてみたい。日本では、女性よりも男性の方が洋装化は早かったようだ。「日記の端より」にも、背広(上衣)が詠まれている。

・上衣よりちよーくのほこり夕ぐれに今日の
　　悲劇を語りては落つ
柴舟ご夫妻のグラビアを見たことがある。

柴舟は三つ揃いにシルクハットとステッキを持ち、奥様は紋付の和装であった。

参考文献

『尾上柴舟全詩歌集』短歌新聞社
『ファッションと風俗の七十年』婦人画報社



偽りの死

令和6年11月19日、妻の三回忌の読経を聞きながら妻は幸せな最期を迎えたのだろうかと言った。家族は誰も妻(母)孝行をしたつもりでいるが、本当は「もう勘弁してください。もつと薬に死なせて!」と叫びたかったのではあるまいか。全身に管を巻かれ静脈には注射針を刺されたままで、身動きの取れない状態で妻は死んだ。

人間、誰しも一度は死ぬ。ならば苦しまず安楽に死にたい。そう願うのが当然である。しかし周囲はひと刻でも長く生きて欲しいという自分たちのエゴで、有りと有らゆる延命に手を尽くす。

妻の死は国の指定する難病の一つである多系統萎縮症(脊髄小脳変性症)に起因するものであった。最後の5年近くは胃瘦によって命を繋いだ。頻繁に誤嚥性肺炎を起こし、その都度入院先の病院から別の救急病院に搬送したが、死の一步手前で何度も踏み止まった。人は老いて死ぬことは避けられないが、妻は老いるにはまだ間のあるうちに死んだ。病状が進んでからは口がきけず、会話が不可能になった。目の位置を確認することで字を読み、会話をしようと訓練したこともあったが、遂に意思疎通は出来ぬままだった。看護師を通じて辛うじて妻の意思を知るだけであった。

死について書かれた本はどれもおおかた美しい。だがこのほど手

にした久坂部羊の『人はどう老いるのか』は、死を冷酷に(客観的に)見つめ、何よりも実も蓋もない記述に逆に心を打たれた。抜き書きすれば左のごとくである。

老いればさまざまな面で、肉体的および機能的な劣化が進みます。目が見えにくくなり、耳が遠くなり、もの忘れがひどくなり、人の名前が出てこなくなり、指示代名詞ばかり口にするようになり、動きがノロノロになって、鈍くさくなり、力がなくなり、ヨタヨタするようになります。

ほかに、つまずく、こける、落とす、引つかかる、食べたものをこぼす、むせる、丸呑みする、オシッコのチヨロツともれ、頻尿、服圧性尿失禁、切迫性尿失禁、溢流性尿失禁、混合性尿失禁に、大便の失禁も生じます。(中略)

精神面での老化は、ほかに頑固になる、キレやすくなる、辛抱がなくなる、愚痴が増える、小言が増える、心配が増える、疑り深くなる、嫉妬深くなる、ひがみっぽくなる待てなくなる…。

と述べさらに「老いと死が受け入れられないいちばんの原因は、世にあふれるきれいな情報、優しい絵空事情報、まやかしの希望情報です。中には有効なものもあるかもしれませんが、医学的にエビデンスのあるものは皆無です」と二へもない。

わたしの妻にとって家族の都合で全身を二十四時間管で繋がれ、食事にはほど遠い胃瘦で生きさせられた日々が、本当に幸せであったかどうか。

実はもつと自然にもつと早く死にたかったのではなかったか。